2024（令和６）年度

３月３日［◎］

国　語

注意

1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
2 問題は声を出して読まないこと。
3 問題用紙は二十四ページ、□一、□二 の二題から成っている。
4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがあれば、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない**。
5 解答は必ず**黒色鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること**。
6 解答はすべてマーク式の解答欄①②……を丁寧に塗って解答すること。
7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消すこと**。
8 解答に関係のない符号（?.レなど）や文字は記入しないこと。
9 解答用紙を**折ったり、汚したりしないこと**。

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

芸術のジャンルを問わず、同時代的な表現に備わった「伝える」という行為のなかには、教育的な役割が必然的に含まれている。だとしても、ここで使われる「教育」はもちろん、数学の方程式や物理の法則を教えたり修得したりすることとはまったく違っている。

これを教育を受ける側の立場で考えると、教育は何かを「わかる」ことを目的としている。つまり、方程式が「わかる」ということは連立方程式の問題を解いて正解を得るということになる。だが、芸術に備わっている役割としての教育は、当然ながら方程式を解くことを目的としているわけではない。では、芸術の教育的な側面にとって、何を「わかる」ことが大切なのだろうか。

現代芸術に関しては、「わかる」どころか、美術にしろ、音楽にしろ、演劇にしろ、「前衛的でよくわからない」という、ある種の否定的な感想を数多く耳にする。また、そうした感想を漏らす人に出くわした人も少なくないだろう。

「前衛的な作品」という言い方に込められた微妙なニュアンスには、「わけがわからない」「むずかしい」という否定的な意味が含まれている場合が多い。「わけがわからない」「むずかしい」という印象を与えることが批評的であると言われることもある。そうした美しい誤解も批評家の言説が加われば、さらに神秘性とカリスマ性が際立つことにもなる。こうなると、もう立派な前衛芸術家の仲間入りである。人を寄せ付けない神秘性とカリスマ性が強ければ強いほど、現代芸術のスノビズム[注1]に見合う人物になる。

実はこの排他的なニュアンス(A)には前衛芸術にとって［ Ⅰ ］な問題が含まれている。無理からぬことだ。というのも前衛芸術にはもともと芸術の資本ジュウゾク(ア)的な性格と、社会規範から相対的に独立しているという自律性、つまり相互に矛盾する［芸術の二重性格］が備わっているからだ。これはペーター・ビュルガーが「歴史的アバンギャルド運動」と位置づけた、一九一〇年代から三〇年代にかけてヨーロッパを中心に大きなうねりとなったダダイズムやシュルレアリスム、ロシア構成主

義の急進的なモダニズムが背景となっている。

二十世紀が生んだ「歴史的アバンギャルド運動」は「前衛」という軍事的な比喩を採用したくらい、前のめりで攻撃的だった。その攻撃の多くが当時の市民社会に対して［Ⅱ］なカルチャーショックを与えることに向けられた。ところが結果として、受け止める市民社会の側としては、排他的で硬直化した独善性を強く感じてしまったという面も否定できない。表向きは市民を解放しようという献身的で利他的な立場を強調しておきながら、世界を意のままに動かそうとする、肥大化したエゴに基づく傲慢なエリート主義であることがどこかに垣間見えたからだ。

前衛的な芸術に(イ)タズサわってきた人々のなかには、「わかる人にはわかる」「誰にでもわかる表現など意味はない」と(あ)うそぶき、鑑賞者あるいは観客がわからなくてもいいと思っていたりするひねくれた態度の持ち主たちがいる。ひどい場合には、「わからない奴はバカだ」などと言いだしたりして、手に負えない。

自分が選ばれた人間だと思い込んでいるエリート意識だけを根拠に、前衛を気取る人たちもいる。これは珍しいことではなく、こういう人は世界中どこにでもいるものだ。こういう「前衛」の人たちには、門外漢の人たちや一般の聴衆を愚かで無知な人たちであると決めつけ、誰よりも自分たちが先端的で知的で、万能であるとする独善性と傲慢さが見え隠れすると言ってもいい。

こうした暑苦しいエリート主義を、現代の美術や音楽あるいは演劇などの現代芸術でも、どこか引きずっているのではないか。結果として、「前衛」は流行にも市場にも左右されない先端的な表現を象徴するという意味の魔法の言葉になりつづけているのかもしれない。

ところが前衛が魔法の言葉になった理由は、もうひとつある。前衛を大義として都市にはたらきかける運動が、結果として祝祭性をもたらしたという点である。《　a　》芸術は都市にとって日常に寄り添う祝祭である。古代から都市と芸術は不可分なかたちで相互に成熟してきた。B近代都市における祝祭の興味深い点は、人間を部品のように使ってしまう巨大な機械としての資本主義と人間の生々しい欲望が、都市という資本化の回路を通じて、確かな関係を表象しているように思えるところに

多くの人が感心したり共感したりすることにある。

前衛は祝祭という儀礼とともにおこなわれてきた。さらにはバザール（Bazaar）やフェア（Fair）といった、都市にもともとあった市場の役割に、スペクタクル（見せ物）の要素が加わって消費されるようになった。もちろん、そのように近代的な都市が祝祭性を帯びる背景には、移動の欲望とそれを引き受ける交通のネットワークがある。

交通という社会の下部構造は、人々に移動の欲望があることを暗黙知としてつくられている。もちろんここには、交換をめざした移動の欲望に、どのような価値が生じるのかというアイデアも含まれている。交通とは、そうした欲望の物量をトラフィック（流量）として表象するシステムである。

移動したいという欲望の物質化とそれに伴う大きなトラフィック（物や人が行き交う量）は当然ながら、都市を変えてしまう。鉄道が都市を変え、近代都市は交通の基地となる。その結果、生産と労働、そして都市に住むという行為は交通のシステムに依存し、その依存によって経済効率が上がり、権力支配が進む。交通によって時間と空間は情報化し、その情報化は新しい組織を生む。《　b　》便利さとは、経済効率や権力支配を受け入れることでもある。都市は交通によってゾーンとして分割され、生活圏も分類される。時間は標準時によって、そして空間は地図によって社会的な（しばしば経済的な）指標になる情報としての機能を果たすようになる。

個々の認識を標準的な指標に合わせる情報化によって、労働も教育もこの指標をもとに管理され、効率よく満遍なく普及することになる。標準的な指標を都市の住民が共有すること、つまりネットワークによる統治を進めることが都市開発となった。もちろん、生産と労働は交通ネットワークを前提とする開発に組み込まれ、それによって生じた新しい階級に応じて、住むこともまた情報になって市場化した。芸術も例外ではなく、消費の対象として市場化されることになる。十九世紀後半から二十世紀にかけて、世界中の大都市でおこなわれた万国博覧会では、消費という欲望を視覚化するシステムが第二次世界大戦前よりもはるかに洗練化・大規模化されるかたちで組み込まれた。芸術もその例外ではなかった。

さまざまな種類の商品を整然と並べ、視覚的な工夫を凝らして売買する方式は、バザールやフェアといった、娯楽性を兼ね

備えた、見せて売る都市の消費のシステムである。人々はいや応なくバザールやフェアでさまざまな知覚を動員することになる。このように、知覚の状態を特別なものにする消費という経済行為がスペクタクル（見せ物）となる瞬間から、並んでいる状態の秩序は欲望を呼び込むものになる。都市では、消費はひとつのカーニバル（祝祭）にほかならない。消費という祝祭が交通のネットワークによって、新しい地域をつくっていった。

それと同様に、表現という行為も情報という形式を伴うことによって、「誰がつくったものか」というように主体を問うようになった。《　c　》価値の交換システムを解体したという点で、[注2]デュシャンのレディーメイドはレディーメイドであることを「見せる」ことではなく「知らせる」ことに価値を見いだそうとしたわけだから、デュシャンのそれは芸術の情報化をめぐる社会実験だったとも言える。

この情報化は厄介だ。情報化が顕著になれば、皮肉なことに社会は官僚化が進む。情報化がプロテスタンティズムの文書主義をモデルにしていることもあり、あらゆる身ぶりと言葉が一定の書式に合わせるように形式化していく。さまざまな芸術も(い)そのご多分に漏れない。デュシャンのレディーメイドが登場するころになると、美術館は公共性の役割をますます強めて、アートワールドを統治する官僚組織になっていた。美術館は蒐集（しゅうしゅう）する（作品を買う）ことによって、芸術家と芸術作品を情報化すると同時に、人々に豊かさを演繹的に推論させる官僚組織になったのである。「知らせる」ことが価値になった芸術は、C演繹的な推論によって、「わかる」ことを問うことが作品の存在意義となった。「わかる」を問い、芸術の情報化を極端に進めたデュシャンは、「芸術作品ではない何か」を芸術に持ち込むことによって、美術館やアートワールドを挑発しつづけた。美術館が官僚組織であり、アートワールドが単なる市場指向の「業界」であることを暴露することで、芸術の「わかる」を問いつづけた。レディーメイドとは芸術の資本論だった。

芸術の資本論については、いち早くヴァルター・ベンヤミンが十九世紀後半のパリという都市に見いだしていた。資本主義は身体とイメージを空間に地域化、あるいは欲望を特定の空間に規範化することにほかならない。消費という祝祭は人々の欲望を市場原理で一元化する一方で、地域化つまり分散化・多様化する側面もある。《　d　》ベンヤミンはさらに一九三〇年

代になって、その消費という祝祭を同時代性ととらえ、より多くの消費者が生産者へと姿を変えうるモデルの提示を呼びかけた。「作品を手に入れる」といった芸術作品をめぐる生産と私有（私的な所有）に関する価値に問いを投げかけたのだ。

ベンヤミンの理想は観客の動員よりも、もっと［Ⅲ］な「群衆」がつくられることにあった。Dベンヤミンにとって芸術は、時代や人間の運動そのものだった。必然的にメディウム[注3]と技巧や様式にどっかりと腰をおろしたサロンなどの価値を決める官僚的なシステムに安住する巨匠を排斥し、映画のように多くの人たちがひとつの経験に集約される動きがベンヤミンにとって重要だった。映画の動きに、ベンヤミンは芸術の本質を見いだそうとした。映画のような動きが進むほど、「名もなき存在」は稀少価値を帯びるようになる。ベンヤミンは、積極的に匿名の観客を巻き込みながら生産される芸術作品のモデルを提示することを夢見たのだ。当時のベンヤミンは、資本家に支配された芸術の体制を解放するモデルとして映画を位置づけていたのだろうと思う。

芸術作品はロマン主義以降情報化あるいは市場化された。《　e　》ブルジョアジーの所有を許してきた芸術の生産様式を、ベンヤミンは同時代のテクノロジーを駆使することで、批判的に乗り越えようとするのである。そういった芸術の生産というプラクティス（実践）の積み重ねに、労働と同時代芸術との関係性、もっと大きく言うと国家、社会、都市あるいは人間といった考え方の根底に意識化されていない欲望や情動が暴露されはじめることを期待し、芸術を反資本主義的闘争に取り込むことによって、新しい都市文化ができあがることを構想していたのである。

ベンヤミンはある作品の政治性について判断するとき、作者が表明している共感や趣味といったことではなく、とりわけ時代ごとの労働と生産という関係のなかで、その作品がどのような位置を占めているかに目を向けるべきだと考えていた。それこそがベンヤミンにとっての都市の祝祭性であり、同時代性だった。祝祭性こそが、前衛的な表現にとってひとつの生命線だった。「物議を(ウ)カモす」といった話題性は、祝祭を通じて自分たちが立てた問いを伝える技芸だったのである。「問い」を伝えるための技芸が前衛芸術の本領だと考えていたと言っていいかもしれない。

（桂英史『表現のエチカ─芸術の社会的な実践を考えるために』による。）

注

1 スノビズム──教養があり上の階級に属しているかのようにふるまう態度のこと。

2 デュシャンのレディーメイド──フランスの美術家マルセル・デュシャン（一八八七～一九六八年）によって考案された作品概念で、大量生産された既製品からその日常的な機能を取り去り、オブジェとして陳列したもの。

3 メディウム──美術作品を制作する材料に使われる絵の具や大理石などのようなもの。

問一　傍線部（ア）～（ウ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）ジュウゾク
1　ジュウドウの稽古をする
2　ジュウライの方針を守る
3　ジュウタイに巻き込まれる
4　日本列島をジュウダンする
5　モウジュウを手なづける

（イ）タズサわって
1　他社とテイケイして開発する
2　ケイジにつき祝いの品を贈る
3　国家へのケイショウを鳴らす
4　浪漫主義にケイトウした作家
5　海外の試合をチュウケイする

（ウ）カモす
1　つらい時もキジョウにふるまう
2　ぬるいお湯でジョウザイを飲む
3　たるの中で酒をジョウゾウする
4　カジョウな表現や描写を控える
5　ジョウチョウな文章を修正する

問二　傍線部（あ）・（い）の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（あ）うそぶき

1　意気盛んに述べ
2　本心をいつわり
3　理屈をいつわり
4　論点をすり替え
5　事態を甘く見て

（い）ご多分に漏れない

1　予想の域を出ない
2　手順がぬかりない
3　多数派に属さない
4　独自性にとぼしい
5　例外とは言えない

問三　空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

1　挑発的　2　体系的　3　啓発的　4　内向的　5　能動的
6　公共的　7　暫定的　8　本質的　9　表層的　10　客観的

問四　本文中の空欄《　a　》～《　e　》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

モノにまつわる情報が価値交換の基準となったように、いきおい芸術の情報化も進むことになった。

1　《　a　》　　2　《　b　》　　3　《　c　》　　4　《　d　》　　5　《　e　》

問五　傍線部A この排他的なニュアンス とあるが、どのようなことを「排他的」と言っているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　自分の表現について「よくわからない」と評する大衆を無知で愚かな集団だと決めつけたうえで、専門家や知識人など一部のエリート層のみが理解できるような芸術を追求しようとすること
2　自分が理解できないものについて「前衛的でよくわからない」という紋切型の表現で済ませ、批評家の言説によって証明された、作品のもつ神秘性やカリスマ性を受け入れようとしないこと
3　誰もが理解に苦しんだり、受け入れがたく感じたりするような表現を自ら意図的に行い、市民を社会的規範から解放することを大義として、ひとりよがりな芸術運動を推し進めようとすること
4　市民社会の立場に寄りそうという意図を表明しつつ、実際には他者の受け取り方は二の次にして、自らを特別な存在だとするおごりの意識に基づいた、自己本位の芸術活動を行おうとすること
5　「誰にでもわかる表現など意味はない」という開き直りの上に自由奔放な創作を行い、世のはやりや経済的な動向に左右されない表現を求めた結果、鑑賞者としての客観的な視点を失うこと

問六　傍線部B 近代都市における祝祭 の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　前衛を大義として都市にはたらきかける運動により、新たに都市と芸術には相互不可分な関係が生まれはじめた
2　都市がもつ市場的な役割を下敷きに、そこに見て楽しむという要素が加わって、芸術が消費されるようになった
3　交通のネットワークが都市をゾーンへと分割したために、権力支配は停滞し、経済効率は低下することとなった
4　時間は標準時を、空間は地図を基準とした社会的な指標となり、組織や地域を統合して都市を変貌させていった
5　情報化による統治にともなって都市開発が進められ、都市内部で労働や教育を管理する指標が多様化していった

問七　傍線部C 演繹的な推論 とあるが、その具体例として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「この小説の主人公は友人に嫉妬心を強く抱いているので、後の展開では報復に出て自分の恨みを晴らすだろう」
2　「この絵の画家は当時の社会情勢に反発していたので、絵に描かれた自然は作者の逃避願望を反映したものだろう」
3　「この小説の作者は幼少時に戦争を経験しているので、その体験が影響して平和運動に力を注いでいたのだろう」
4　「この絵には繊細な色や筆遣いが認められるので、描いた画家はきっと写実的な手法を好んで使っていたのだろう」
5　「この小説の作者はどの作品にも耽美的な文体を用いているので、今後も情緒的な作風の小説を発表するだろう」

問八　傍線部**D**ベンヤミンにとって芸術は、時代や人間の運動そのものだったとあるが、次の文章は、ベンヤミンと似た志向を持つドイツの劇作家ブレヒトの考えについて筆者が説明したものである。空欄 i ・ ii に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

> 教育劇でブレヒトが意図したのは、作品が国民国家やブルジョアジーによって i 、芸術家と観客が完全に分断され、その分断線として劇場や美術館、音楽ホールに機能してしまうことに批判の矛先を向けることである。つまりブルジョアジーとプロレタリアートなど、生産と労働によって、社会で規定している分類が解消され、芸術に所有の概念がなくなり、そこでは余暇や労働といった時間の区別が解消され、それらの関わる人々が一体になって「群衆」となり、その動員力によって「祝祭」がつくりあげられていくことを夢見たのだ。
>
> ここには、近代社会や資本主義に対する強烈な批判的メッセージを基礎とする「 ii 」や「動員」の起源を見ることができる。
>
> （本文の別箇所より引用）

	i	ii
1	恣意的に鑑賞され	大衆
2	個人的に買収され	占有
3	顕示的に消費され	断絶
4	独占的に所有され	参加
5	一方的に受容され	生産

問九　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　芸術は、作品を通して鑑賞者に一定の知識や教養を与えるという意味において、教育的な性質をもつものである
2　前衛芸術は資本主義的な社会体制を徹底的に批判した点において、一部の人々には受け入れがたいものとなった
3　都市が祝祭性をおびたために、万博に代表されるような見せ物を観客に消費させる場としての市場が成立した
4　デュシャンは、美術館やアートワールドの統治的なあり方が芸術の本質を踏まえたものではない点を批判した
5　ベンヤミンは、映画を新しい芸術の形として解し、人々を生産者と消費者に分ける資本主義のあり方を批判した
6　多くの人々の関心を呼ぶ前衛芸術は、「芸術とは何か」という問いを立てることに真価を発揮していたといえる

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

注1ポリティカル・コレクトネスが社会を覆う状況にだれもが息苦しさを覚えるのは、「とんでもない責任のインフレ」＝「無限の負債」を感じるためである。A<u>そのうっとうしさから</u>逃れようと、すべての「負債」を肩代わりしてくれる犠牲の羊（スケープゴート）を探し出し、「魔女狩り」のように「炎上」させ、「自らの行為の責任をやすんじて免除する」ことが繰り返される。

行為者（の意図や予見可能性）ではなく、行為の結果を中心とする責任理論の転換は、近代リベラリズムにおける無自覚な差別を批判することを可能にした。しかし、いまやそのような責任理論は、マジョリティによるアイデンティティ・ポリティクスに流用され、ポリティカル・コレクトネスをめぐる言説のうっとうしさの原因となっている。

ポリティカル・コレクトネスをめぐるうっとうしさや息苦しさから、どうすれば解放されるのだろうか。おそらくふたつの方法がある。ひとつは、「原罪」のような責任がみずからにあることを積極的に認め、「責任のインフレ」＝「無限の負債」に耐えることができるB<u>強い主体をつくり出すこと</u>である。もうひとつは、一切の「責任」概念を放棄・破棄することを社会的規準として採用することである。

ひとつ目は、近代リベラリズムが理想としたような、「自律」的な「個人」をさらに推し進める方向である。ポリティカル・コレクトネスの遵守を(ア)<u>トナ</u>えるひとびとの多くはこの発想に立っているように思われる。「同意」や「コンプライアンス（法令遵守）」を強調し、プライベートの場面でも他者との関係を、義務や権利が発生する契約関係とみなす発想である。そして、そのような契約関係をもとに物事を適切に判断し、遂行できる「市民」の育成に期待するのである。このような考えにおいても、差別がしばしば無自覚におこなわれること自体は認められている。だが、いっぽうで、教育や啓蒙、もしくは激しい非難や糾弾（規律／訓練）によって改善可能なものだとも考えられている。

たとえば、「ハラスメント」にかんする啓発活動は、ひとびとがみずからの行動にいっそう意識的になることで、無自覚な差別を減らすことを期待している。もし、万が一、無自覚な差別を指摘されても、「自律」的な「個人」として、みずからの

差別の「責任」を引き受けられるような主体が理想とされる。つまり、近代的主体の責任概念、そして責任能力を超えた「責任」さえも積極的に認めることができる、ポリティカル・コレクトネスの息苦しさをものともしない強い主体である。しかし、このような強い主体に人間はそもそもなりえるのだろうか。

近年の認知科学の発展は、「自律」的な「個人」というモデルを覆しつつある。ここで心理学者のバナージとグリーンワルドが潜在連合テストを実施し、反差別運動に協力している人にも潜在意識レベルでの偏見が見られることを確認し、そのような人たちを「差別主義者」ではなく、「居心地の悪い平等主義者」と呼んだことを思い出そう。差別が必ずしも［Ⅰ］なものではないこと（主観的には有無・存否を判定できないこと）を科学的な知見によって裏付けたものだ。教育や糾弾にはもちろん一定の効果はあるだろうが、人間はみずからの行動すべてを意識的に制御できるわけではないことを、認知科学の知見は示している。

もうひとつの方法は、一切の「責任」概念なしで社会制度を構築することである。すでに指摘したように、差別につながる［Ⅱ］や潜在意識があきらかになるなか、近代的なリベラリズムが理想とする「自律」的な「個人」は前提とすることができなくなっている。さらに近年、「自律」的な「個人」というモデルの大前提になる「自由意志」の存在にも疑問符をつけるような知見が存在感を持ち始めている。行為者（の意図や予見可能性）を中心とした責任理論が近代的な法の規準となっていた。しかし、一見、自由意志に基づいて選択をしたかに見える行為が、周囲の環境や身体的な特性によってあらかじめ決定（強制）されていたとしたら、どうだろうか。

刑罰理論における応報主義と帰結主義という考え方がここでは参考になる。たとえば、現在の日本では絞首刑による死刑が認められている。死刑とは政府がおこなう場合にだけ認められた合法的な殺人である。政府以外の組織や個人・団体の場合、その執行は認められず、殺人という犯罪とみなされる。つまり、刑罰とは、身体の拘束や財産の剝奪など、本来ならば（通常の市民生活にあっては）犯罪とみなされる行為を、政府が合法的におこなう、というきわめて特殊な制度なのである。この特殊な制度である刑罰を正当化するために、応報主義と帰結主義というふたつの考え方がある。

犯罪者は自由に行為を選択して法を犯した。それゆえ、犯罪者はその行為に見合った罰を受ける。これは当然の報いである。このように刑罰を正当化する議論は、応報主義と呼ばれる。いっぽうで、刑罰は、ほかの犯罪を抑止するなど、さまざまな社会的利益を期待できるとして、その社会的利益をもって刑罰を正当化するような議論は帰結主義と呼ばれる。

ジョシュア・グリーンらは、刑罰理論における応報主義を修正し、帰結主義的に正当化すべきだと主張している。グリーンらは、「どんな犯罪者の犯行も、さらには我々すべての行為も、自らのコントロールの外にある諸原因によって決定されている」のだから「決定論的世界において犯罪者に対する応報主義的な態度は的外れであり、我々の適切な態度はむしろ憐(あわ)れみ（と必要に応じた隔離）である」と指摘している。その根拠としてグリーンらは、ベンジャミン・リベットの実験をはじめとする、C<u>自由意志の存在を否定するかのような科学的な知見</u>を紹介している。

リベットの実験とは次のようなものだ。リベットの実験に先立ってコルンフーバートとデーケの実験によって、被験者が自発的に手首の運動をおこなうと、実際の運動よりも約八〇〇ミリ秒（〇・八秒）以上まえに、脳活動の電位変化＝「準備電位」が起きることが判明していた。これにたいしてリベットは、被験者に手首の運動をおこなわせ、「手の運動を実行しようとする意識的な「意欲」が生じた時点」を報告させる実験をおこなった。すると、準備電位の始動、意識的な意欲が生じた時点の報告、実際に意識的な意欲が生じた時点、実際の手の運動がそれぞれ割り出された。リベットはこれらの実験の結果から、「自発的な行為に繋がるプロセスは、行為を(イ)<u>ウナガ</u>す意識を伴った意志が現れるずっと前に脳で無意識に起動」すると結論づけた。リベットの実験結果は、自由意志の存在を否定する脳神経学の知見として取り上げられ、実験の(ウ)<u>カイシャク</u>をめぐっては論争が巻き起こった。

ジョシュア・グリーンらはこのような科学的な知見を(あ)<u>援用しながら</u>、罪を犯した者に相応の刑罰を与えることをよしとする応報主義ではなく、社会の利益によって刑罰を正当化する帰結主義という考え方を支持している。この考え方によれば「社会に危険を及ぼす人物の拘束や、人々の犯罪を思い止まらせる抑止効果、といった社会への有益性が刑罰の正当化の根拠になる」。

哲学者の木島泰三は、刑罰を帰結主義的に正当化する議論（とりわけ『自由意志なしで生きる』のダーク・ペレブームに典型的な議論）において犯罪者は「危険な伝染病者」のような扱いをうけるとしている。つまり、犯罪者は社会に危害を与えないように「隔離」され、犯罪に導く要因を取り除くための「治療」がほどこされる。ひとびとの処罰感情に左右されがちな応報主義に比べて、刑罰の苦痛も軽くなり（たとえば死刑は正当化されない）、より優れた社会的な効果をあげることが期待できる。しかし、犯罪に導く要因の「治療」が困難である場合には、社会から半永久的に「隔離」されたり、あらかじめ犯罪に結びつく性質が把握されれば、犯罪が予想される人物を未然に「隔離」するという予防的な措置がとられる危険性がある。

さて、ポリティカル・コレクトネスが、現在の<u>趨勢</u>(い)として、中規模以上の企業や大学などで実施されている「ハラスメント」の禁止領域を社会全体にひろげようとする運動であることはすでに指摘した。だが、それは、差別を告発された人間（差別者）に、法に成り代わって、企業や大学が社会的な制裁をくわえることにもつながっている。しかし、こうした制裁はどう正当化できるのだろうか。差別者はポリティカル・コレクトネスに違反した行為をおこなったのだから、その行為者（差別者）には相応の責任があり、その責任に見合った罰を受けるのは当然の報いである……。このように刑罰理論の応報主義に類比して正当化することが可能である。しかし、差別問題における責任は、近代的な法が前提とするような行為者（の意図や予見可能性）に基づいた責任とは異なるのだった。ヘイトスピーチといった差別表現は例外として、行為者の（主観的な）意図の有無をもって、その行為が差別であるかどうかを判断することはできない。

差別を禁止する法が制定されるとして、D<u>差別への刑罰は応報主義的ではなく、帰結主義的に正当化せざるをえないだろう</u>。おそらく帰結主義的な立場から想定される刑罰の例が示すように、差別への対処は「抑止」「予防」「治療」へと還元されていくのだろう。たとえば、次のような例を考えることができる。

抑止――差別者にたいして、見せしめ的な損害賠償や刑罰を科すこと

予防――「アーキテクチュア」の設計

帰結主義にあっては行為者の責任を追及することはない。そのため「とんでもない責任のインフレ」からは解放される。しかし、これは別の「統治」を導くことになる。「第五章　合理的な差別と統治功利主義」で見た功利主義の特徴のひとつに帰結主義がふくまれていたことを思い出そう。帰結主義的な刑罰は「統治功利主義」とも相性が良いのだ。ミシェル・フーコーは『安全・領土・人口』で「統治性」という権力概念を考察した。「統治性」とは、羊飼いが羊の群れを管理するようにひとびとを総体としての「人口」として管理する生（せい）権力である。注意すべきは、フーコーはこのような「統治性」に言及する際、コストと便益から刑罰や抑止を考えるその発想を指摘し、天然痘といった伝染病を例に出していることだ。「統治性」とは国家行政の権力であって、中国で台頭しつつある「統治功利主義」だけが特殊かつ例外的な事例というわけではないのだ。統治功利主義は［Ⅲ］しうる。

　そして、このような帰結主義的な対処は、反差別運動によって部分的に実現されてきたともいえる。たとえば、二〇〇九－一〇年に[注2]在特会が京都朝鮮学校の前で街宣活動をおこなった事件では、在特会側のメンバー八人に一千万円を超える賠償を命じる判決がくだったが、ヘイトスピーチにたいする「抑止」効果を結果的にもたらした。また、**Twitter**や**Facebook**などのSNSで、差別的な発言や性的な表現の投稿の禁止が求められ、一部ではアカウント停止などの措置がとられているが、それはまさに「アーキテクチュア」の設計である。DVや痴漢は依存症であるとしてカウンセリングの必要性が論じられ、再犯率が高い性暴力の犯罪者には薬物的な去勢が検討されているのは、性差別やそれにともなう暴力が「治療」の対象ともなりつつあることを示している。「自律」的な「個人」の確立（あらゆる「責任」を引き受ける強い主体）が目指されるいっぽうで、そのような「市民」像を根底から否定するような効率的な「統治」、いいかえれば、帰結主義的な「抑止」「予防」「治療」が導入されているという矛盾がここにはある。

（綿野恵太『「差別はいけない」とみんないうけれど。』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注　1　ポリティカル・コレクトネス――筆者はこの語を「『差別に対する言説や運動、猥褻な表現、残酷な描写の規制を求める言説や運動』であり、しばしばそれらに否定的な意味合いを込めて指し示す言葉」と定義している。

2　在特会――日本の市民団体。正式名称は「在日特権を許さない市民の会」。

問一　傍線部（ア）～（ウ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）トナえる

1　能楽ハッショウの地を訪れる
2　事業がアンショウに乗り上げる
3　歌や詩をエイショウする
4　割ったお皿をベンショウする
5　防音用にカンショウ材を設ける

(イ) ウナガす

1 ソクザに反論を述べる
2 セッソクな作業を慎む
3 逃げる犯人をホソクする
4 今後の動向をスイソクする
5 新陳代謝をソクシンする

(ウ) カイシャク

1 シャクヨウショを用意する
2 必死になってシャクメイする
3 王からシャクイを授けられる
4 地図のシュクシャクを調べる
5 シャクリョウの余地を認める

問二 空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

Ⅰ 1 露悪的 2 意図的 3 外罰的 4 一方的 5 例外的

Ⅱ 1 オブジェクト 2 カテゴリー 3 ニヒリズム 4 バイアス 5 カタルシス

Ⅲ 1 可逆化 2 形骸化 3 世俗化 4 記号化 5 遍在化

問三　傍線部（あ）・（い）の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（あ）援用しながら

1　一定の評価をしつつ修正しながら
2　積極的に賞賛を加え紹介しながら
3　自説の補強のために引用しながら
4　あくまで参考程度に参照しながら
5　都合のよい部分を抜き出しながら

（い）趨勢

1　反省
2　偏重
3　動向
4　目標
5　宿願

問四　傍線部**A**そのうっとうしさとあるが、その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　差別的な行為や表現が差別的な意図をもってなされたかどうかではなく、実際に差別であったかどうかだけが問題にされることに重い責任を負わされると感じてしまうこと

2　差別的な行為や表現をしないように求める運動が、差別的な行為や表現をおこなった責任者を、「炎上」を繰り返してまでも探し出そうとすることに息苦しさを感じてしまうこと

3　差別的な行為や表現を規制しようとする本来正しい運動を指し示す言葉が、行為の結果ばかりを重視している姿勢のせいで、否定的な意味合いを込めた言葉となっていること

4　ある行為や表現について、それをおこなった人の意図や予見可能性に応じて、差別であるかどうかを認定するポリティカル・コレクトネスが社会を覆っている状況が存在すること

5　ポリティカル・コレクトネスをめぐる言説から、善良な自己を確立している多数派が差別的な行為や表現を繰り返す少数派を抑え込もうとする政治的な意図が感じられてしまうこと

問五　傍線部B強い主体をつくり出すことあるが、これについての筆者の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　法令遵守の精神や契約関係に基づく物事の判断能力を養い、必要に応じて規律や訓練を施すことは、無自覚な差別を解消するための段階的な方策である

2　人間が差別的な行為も含め自らの行為を自分の意志でコントロールできるほど強い「自律」性を持った存在になれるかどうかは、科学的な見地からも疑問である

3　権利や義務の意識が高い「自律」的な「個人」であっても、差別を無自覚におこなうこと自体は認められているので、差別を解消する方向としては不十分である

4　責任を自ら積極的に引き受ける自我を確立することは、ポリティカル・コレクトネスをめぐるうっとうしさから解放されるための方向性の一つとして有効である

5　近代的主体の責任概念や責任能力を超える強い個人を生み出すことこそ、ポリティカル・コレクトネスをめぐる現状を打開できる現実的な方策だといえる

問六　傍線部C 自由意志の存在を否定するかのような科学的な知見 とあるが、リベットの実験によって判明したどのような事実が「自由意志の存在を否定」するのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　実際に意欲が生じた時点と実際の手の運動に時間的なずれがあること
2　意識的な意欲が生じた時点と実際に意欲が生じた時点という二点が存在すること
3　意識的な意欲が生じた時点と実際に意欲が生じた時点に時間的なずれがあること
4　自発的な行為は「意識→脳→行動」という三つの段階を踏んでいること
5　手を動かそうと思う前に脳活動の電位変化が起きていること

問七　傍線部D 差別への刑罰は応報主義的ではなく、帰結主義的に正当化せざるをえない とあるが、「応報主義」と「帰結主義」について筆者はどのように考えているか。その説明として適当ではないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　犯罪とみなされる行為に対する刑罰を正当化する根拠として、応報主義と帰結主義というふたつの考え方がある
2　応報主義は刑罰の根拠としては不適切であり、社会への有益性の観点から刑罰をおこなう帰結主義が理想的である
3　自由意志の存在を否定する立場からは、自由に行為を選択して法を犯したものを罰する応報主義は否定される
4　帰結主義的な刑罰は、コストや便益という観点から国家統治を考える「統治功利主義」と親和性が高いといえる
5　刑罰を帰結主義的に正当化することには、予防的な措置の名のもとに不当な「隔離」がおこなわれる危険性がある

問八　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

1　ポリティカル・コレクトネスを重視する人々の多くは、人は自らの責任に自覚的でそれを負うことができると考えている

2　差別を解消することに関して、激しい非難や規律・訓練などは全く効果がないことを近年の科学的知見は示している

3　近代的な法の規準が依拠する責任理論は、差別の禁止にあたっては適用が難しいことを示す研究がいくつかある

4　政府が行う合法的な殺人である死刑制度の根拠としては、応報主義を支持する声が現時点では優勢と言ってよい

5　帰結主義に基づく刑罰では遺伝子操作などの治療によって人間性が入れ替わるため、責任を追及されることはない

6　差別的な行為や表現がおこなわれないよう、差別者には帰結主義的な観点から自律的な個人の確立が求められている